

「鳥羽伏見の戦いと銃器」

徳島・海陽町立博物館

講師 木村幸比古

○ 阿波の火縄銃

鉄砲伝来の天文12年(1543)の凡そ30年後(元亀3年・1572)に阿波藩では川島合戦に紀州勢1千丁の火縄銃ももって寄せ手に参戦した。阿波藩は藍の寝床から良質の硝石を製造できたことから阿波の火縄銃は他藩に比べ急速に発展した。阿波藩は慶応2年(1866)大砲259門、小銃8232挺と堺、国友にならぶほど製造され、西洋銃が輸入されるまで製造された。オランダからゲベール銃(獵銃)がフランスからミニエー銃が入ると日本人の体格にあわせた銃底のつきの、西洋模造銃が鉄砲鍛冶、刀鍛冶らによって各藩で製造、とくに水戸藩の矢倉奉行の矢倉方は西洋銃(ペリー来航での贈答銃)を大量生産し、優良銃は他藩へも売却した。一方、長崎イギリス商人グラバー(マジション商会の子会社グラバー商会で不動産業、銃器、軍艦のほかビールなどを販売、維新後岩崎家はグラバーと組み麒麟ラガービール会社)がアメリカ南北戦争の廃銃を持ち込み、坂本龍馬らの亀山社中を通じ薩摩名義で大量に買い入れ長州藩らに横流しした。日本人が使いやすく性能のよいイギリス製のスナイドル銃、ドイツのドライゼ銃、アメリカのスペンサー銃が幕末から明治初年に輸入された。鳥羽伏見の戦いには、新政府軍、旧幕府軍は火縄銃が主流であるが、双方が西洋銃を使用した、薩摩はさらに大量の大砲を使用し、錦の御旗を押し立て天皇軍として勝利した。新政府は西洋銃で戊辰戦争から箱館戦争、さらに西南戦争まで使用され、幕末期の軍靴(ブーツ)は篠竹の多い河原の奇襲作戦では履き、グラバー商会では大量の蒙古靴を戦争見込んで製造し、倒産の要因の一つとされる。

○ 鳥羽伏見戦い絵図の成立過程

明治16年(1883)鳥羽伏見の戦いの真実を後世に残す手段として、参戦した兵士から聞き取り調査で、発起人の元長州奇兵隊林友幸らが作成した。小松宮彰仁親王、公家の東久世通禧ら協力のもと、当時の戦況や戦場、参戦者の軍服、指揮者の衣紋にいたるまで、参戦の実体験の口伝(oral instruction)をもとに、絵図作成までに6年の歳月かけ、明治22年(1889)1月原画が完成した。

明治天皇へ原本は献上、副本で版刻(木版刷り39場面)を、明治24年(1891)2月、保勲会から少数を関係者へ頒布(非売品)。跋文の解説書「戊辰戦記」が国立国会図書館所蔵資料として現存する。それは新政府軍、旧幕府とも混成部隊での戦闘で、混乱した戦況のなかでの記録や伝達には、限界がありいなめない。戦記資料は勝者の立場描くことが多いが、戦記は敗者の公平性を目論み、旧幕府軍を賊軍などの表記をせず旧藩名、幕府軍、東軍として扱い、庶民の目線でみた戦況や風俗をあえて描いている。

今回は戦記の前編のみの発表にとめるが、最後は「函之館戦」(箱館戦争)までである。明治40年9月、ドイツ人エーマンが着色し、東陽堂からその際の戦記解説書をもとに、部分的な解説付きで刊行された。

○ 幕府の兵制改革と軍服の変遷

文久2～3年（1862～3）、文久の兵制改革で幕府は幕府陸軍を設置し、西洋兵制の3兵戦術を導入し歩兵、騎兵、砲兵の軍制とした。1857年版のオランダ歩兵教練書を翻訳した「歩軍操法」をもとに調練した。軍装は筒袖の小袖、陣股引、しゃも袴の着装とした。上級士官の上着は、筒袖の小袖に三斎羽織（和装の振袖を袖口にそって細くしぼる、背中では背開き）。股引は、本来下級武士、農兵のはくものであった。だんぶくろの袴はフランスの military pant にはない「だんぶくろは袴腰板これあり分」は許可する。軍用 pant に腰板のついた日本独自の軍装であった。（剣術の道着には腰板があり、長時間の戦闘に耐えられ、下腹の丹田に力が入る）ベルトの代用品としたのか。慶応の兵制改革で幕府はフランス式調練を全面的に受け入れたが、慶応2年（1866）5月、調練服には制限をもうけた。英国仕立ての羽織（coat）は認めない。生地は木綿、ラシャなど自由だが、黒色(black)のみと限定された。薩摩藩はじめ各藩もこの調練を採用した。（慶応2年・1866 兵制改革でフランス式を採用したが、制限を設け和装から転用し、独自の軍装、軍服にした）英国仕立ての軍服（英国の植民地意識）は認めないが、高級生地のラシャは自由とされた。薩摩藩は鳥羽伏見の戦いを想定し、西郷隆盛は鳥羽伏見の戦いに備え、買付掛の大山巖に命じ横浜のスイス人ファール・ブランド商会から直接買い付け一挺17、8両の西洋銃（おそらく最新式ミニエー銃、スナイドル銃、スペンサー銃）を8、9両で大量に購入した。大山巖は大砲に砲隊長をつとめ弥助砲を考案している。大山の父大山綱昌（鉄砲好き）は養子で、西郷隆盛とは叔父の関係で、砲術研究家で役職にもつかず、命日には線香より煙硝を焚くようにいわれ、墓碑には鉄砲が刻まれている。

2 会津藩伏見上陸

往来する庶民は戦端する気配すら感じられない。むしろめずらしい洋犬が描かれている。胴体はロングコートからイギリスのセターの猟犬のようである。イングリッシュセター（English setter）は安政条約の開国以来、イギリス人が鴨撃ちのハンティング用に持ち込まれた。このセターはぶちの「ブラック ベルトン」で固体から雄とみられる。伏見市中（およそ2万人）での洋犬が珍しい。居留地のイギリス人が犬を呼ぶとき「come here/come on」ということから、当時日本人は洋犬を「カメ」とよんでいた。伏見では旧幕府会津兵士が高札場に集まり、陣笠に陣羽織に狩の袴姿、葦山笠に「だんぶくろ」姿とまちまち、会津藩砲術師範山本覚馬から調練を受けた兵士は刀をサーベル差しで、当時「ドン差し」と呼ばれていた。刀、槍を持つ兵士ばかりで銃器の兵士は見受けられない。会津藩藩校日新館では10歳になると剣術、槍術、弓術、水練は必修。会津藩の槍術流派は大内流、宝蔵院流、高田派一旨流さかんであった。砲術は古式で山本覚馬が江戸遊学で佐久間象山から西洋砲術を習得した。林権助の進言で会津藩の軍事取調兼大砲頭取を任命された。藩内の西洋調練は覚馬が指導する。伏見市中に入るは時点で、戦闘の緊迫感を伏見の庶民に与えなくなかったのか銃弾砲隊の姿はない。覚馬の弟山本三郎と小川渉は、会津藩 町田伝八隊として鳥羽伏見の戦い参戦した。絵図のなかでひととき目立つ、西洋調練を受けた兵士の正式「黒のだんぶく

ろ」姿から葵の旗を持つのが三郎で、会津藩旗を持つのが小川かもしれない。三郎はその後の戦いで銃弾を浴び負傷し、船で運ばれ江戸会津藩中屋敷内で死んだ行年20。三郎の所持の着物と遺髪は会津の山本家に届き、姉八重（のち新島襄の妻）は、会津戦争に三郎の着物姿で籠城したときはスペンサー銃を使用。

3 会津藩上京差止

大政奉還後もまだまだ伏見は、幕府の影響力が強かった。会津藩は東本願寺伏見別院の陣営に入り、書状をもって市中に入ることを通告した。これに対し新政府軍の幹部である鳥尾小弥太、林半七（両名は調練服姿）ら6名が率兵上京の差し止めを申し入れる。応対するのは紋付袴の会津藩士ら幹部ら林権助で、薩摩を討つ「討薩の表」を大義名分としていた。解説では大阪城に3万の旧幕府兵士とあるがこれは誇張された表現で、すべてあわせても1万5千ほどであった。ただ新政府軍は京都市中の兵士の配備ができておらず、何としても進軍を差し止めなければならなかったという。双方が玄関先に式台の上に立つたままでの応対があるが、新政府軍林半七ら土足のままで緊迫感が漂う。

4 鳥羽関門応接

東軍（旧幕府軍）の戦死をみると、東軍兵士は、2つにわけることができる。將軍直属の幕臣で正規の調練を受けた兵士は、黒色レキション羽織、袴姿。諸藩の兵士は和装の軍装である。文久2年（1862）「武家服制改革」で羽織袴が平服となる。調練には裁着袴、戎服（えびすふく）の筒袖上着に細袴（陣股引、だんぶくろ）、布地も木綿の代わりに、羅紗、呉絹（ごろ）厚手の毛織物を使用した。

当時の幕府の調練は文久3年「フランス軽歩兵教本」を翻訳した「仏蘭西歩兵程式」で世界的にもハイレベルな内容であった。さらにフランスの軍事顧問団を招聘してからは、ブリュネ大尉の提言もあり、号令はフランス語で二本差し刀は伝習に不向きとフランス式の軍刀（サーベル）にした。髷を切り、靴もはき、軍服も輸入されフロックコート（長マント）、ジャケット型（半マント）下パンツはタローズ（だんぶくろ）とした。慶応2年（1866）7月、戎服（軍服）はそぎ袖羽織、細袴が陸海軍の平服となり、西洋服とよばれた。和洋折衷の軍服であった。筒袖も和服の広めの袖で動きやすい服装にした。マントルの前身ごろには輸入もののボタンがつけられ、胸にポケットがついたのが特徴である。

薩摩は野津七左衛門、椎原小弥太とアシの中に薩摩兵士に身を潜ませた。徳川大目付瀧川播磨守が対峙している。瀧川は最後の通告を野津に告げる。新政府軍は時間稼ぎのため、この地を死守する。徳川兵は調練服を軍装で整列させ大砲3門を引出している。双方はにらみ合いがつづく。

5 鳥羽関門戦争

戦闘時間帯は慶応4年（1868）正月3日午後5時ごろ、火ぶたのきられたのは、小枝橋付近「おせき茶屋」で、薩摩兵士が空に向けて撃った1発の発砲音は、伏見でも聞こえたという。「ラッパ（フランス式）の合図を示し合わせ、両所の大砲を続け撃ち、左右の銃隊をもって攻め立たり」（輦下日載）この砲声は大阪城の幕臣西周も聞いた。薩摩の川路利良

(のち警察大警視)の報告では「不案内の地にて弾丸多数飛来、1番遊撃隊小倉壮九郎ら240名も同様に家に隠れ土手に隠れに臥し、味方の弾丸と判断しがたく、鳩笛で合図をとり味方の相対を知り、それより敵の後ろに迫り、木屋の陰より撃ち敵を散々散らした。味方大いに勝利した」とある。旧幕府軍の先陣は佐々木只三郎が見廻組を率い応戦したが、着物姿で刀槍をもって斬り込んだ。薩摩兵士はミニエー、スナイドル銃で狙い撃ちされ、歩兵隊のほとんどが銃(国産西洋銃ゲーベル、一部古式銃)に弾込めができてなく、桑名砲隊の援軍でしのいだ。旧幕府軍は公家東久世家の蔵から、米俵で胸壁を築いた。さらに8時に城南宮へ奇襲をかけた。戦死者は薩摩3名、負傷者10名、旧幕府軍12名が戦死し銃器の格差がでた。

6 伏見戦争

薩摩軍は伏見酒蔵のち酒樽に砂を入れ、敵の砲撃の跳弾でしのぐ作戦。薩摩兵は寒さに弱い弱点がある。食糧調達を確保、藩出入りの仕出し屋を使う。炊き出しの配送は年配者で若い女性をさけた。酒を同じ大きさの土器で灘のたる酒を振る舞っている。酒のつまみはスルメイカ縁物、神前に備える、(寿留女)結納品にもつかう。タイとおもわれる大きな魚がさばかれている。料理人はおそらく居合術の刀さばきの腕前の毒見役がつとめていた。旧幕府軍は食料調達に苦慮し、正月用に飾りの餅を焼いてく飢えをしのいでいた。

旧幕府は伏見の鎮守社で徳川家ゆかり御香宮に陣をかまえたが、宮司三木(そおぎ)は朝廷に伺い立てると早急に立退きを命じられ、薩摩の陣営になった。南側の伏見奉行所に新選組、会津藩は陣を張った。「3日、新選組の沖田、永倉、原田など25、6名が奉行所の集会所に一同となって灘の銘酒の鏡をぬいて酒を酌み交わしていた」(永倉新八新選組顛末記)伏見は酒どころ、どうして灘の酒を飲んだのか。上方の酒といえば灘で辛口で、戦の出陣にふさわしい。伏見の酒は甘口が多く宴席で飲まれていた。薩摩兵は御香宮の裏の高台に大砲の12ドイム臼砲(きゅうほう)を伏見奉行の陣営に向けて10発ばかり打ち込んだ。焼玉が屋根にあたり伏見奉行所のあちこちから火の手があがる。この時、「新選組を指揮していた土方歳三は隊士を庭に集め、大砲1門を御香宮に向けて応戦させた。薩摩兵は猛烈に半時ばかり応戦してきた。土方は永倉新八に2番隊を引いて斬り込んだが押しも出された」(新撰組顛末記)平成元年に国学院大学の同期生の関西文化財調査会吉川義彦氏が伏見奉行所の発掘調査でこの大砲の不発弾を見つけた。地中30センチで私に立ち合いを求められた。なぜ爆発しなかったのか、私見だが厠に着弾したとおもわれる。

伏見の住民にすれば、まさか戦いになるとは、大八車を用意するまもなく、着の身着のまま近隣の姻せきのもとへ逃げ惑う。肥溜めに身を隠す。絵図で農民まで描写することで、徳川幕府の崩壊を示す目的がくみとれる。

8 西郷吉之助伏見戦場巡視

薩摩兵死者6名、負傷者25名、長州兵死者4名、負傷者21名、旧幕府軍は死者49名と大久保利通日記「官軍勝利、賊退散の注進これあり」が史実を裏づけている。昼頃、西郷隆盛が歩いて実地視察に長州兵をおとずれた。西郷の軍装は、サーベル差しのドン差し、わ

らじばき、西洋砲術家高島秋帆が考案した半首笠（はっぷりがさ）筒袖上着、だんぶくろ袴はフランス式のパンツ（military pant）。薩摩軍は半首笠を採用したのは、三角笠は敵陣から被写体が大きく、距離感がつかめない。西郷と立ち話をする長州兵を指揮する林半七は蕨山笠に輸入品の西洋軍装の上着はラシャ地で、ブーツには横文字が貼ってある。長州兵は蕨山笠、パンツには、縦線ステッチ入りで西洋スタイルだが、ベルトでなく、フリーサイズの幅広の帯式である。西洋銃にはすべてバンドつきで、調練を受けていて統一されている。西郷隆盛の弟従道と甥大山巖が禁門の変で黒ラシャ地・金モール軍服姿で大久保利通と密談していた文献がある。会津藩記録「この日辰ノ刻（午前8時）薩摩藩2名、美麗の戎装（軍服）したる者来りて、一蔵（大久保利通）と密談したり」

※東征総督有栖川宮の御用達であった大倉喜八郎は明治4年（1871）廃藩置県、翌年の徴兵令で明治政府の改革を予感し外国貿易に着手した。明治5年4月、私費で西欧へ通訳を伴い視察に出かけ、西欧兵士の軍服はラシャ地で、明治政府軍の軍服が木綿の粗末であると、大久保利通にラシャ地にすべきと進言した。これを受けて大久保は、官営工場の千住製絨所を開設し軍服用を製造した。

9 仁和寺宮御里坊軍議

重厚な正門の両側には出窓があり、軍議は開かれた仁和寺宮御里坊は初め休息所であり、維新後に取り潰されていて、それを物語る貴重な絵図といえる。4日朝、軍事総裁仁和寺宮は征夷大將軍となり諸大夫の上間で、髪は髻（もとどり）を結ばない、床几に座り沢瀉おどしの甲冑姿、虎皮の尻鞆かけた太刀を佩刀。左側の上席には議定松平春嶽、同伊達宗城、参謀高崎正風、右側を議定山内容堂、参与後藤象次郎、同中沼了三。議定は紋付袴、参与は襟付き背開き陣羽織姿。このときの軍議で決定を参与の大久保利通が伝えには、御所の警備を第一にして、見張りの兵士をもって進軍すべきであると伝えた。高瀬川堤薩州兵大砲戦で、薩摩軍は四斤野砲3門で会津兵の槍部隊に撃ち込んで蹴散らせている。この野砲は平射弾道（直線に近い弾道で野戦などでの砲撃できる）で有利に戦いをすすめている。

10 勅使四条津藩の戦状を見る

橋本の戦いで、旧幕府軍徳川兵は薩摩兵と応戦していた、そこへ援軍するはずの津藩の寝返りで、対岸からの4斤野砲を3門で側面攻撃を受けた。徳川兵に命中するたびに津藩藤堂兵から歓声があがり小躍り、その戦況を勅使四条太夫隆平は四条家執事小西有三の報告を受けながら長府藩主毛利元功とともに視察し、藤堂の寝返りに満足し勝利を確信した。

13 征夷大將軍節刀拝受

御所八景の間で征夷大將軍の宣旨を賜り、御休所で錦旗を下賜、御学問所で節刀を賜る。（東伏見宮家記）錦の御旗は岩倉具視が大久保と相談し長州の品川弥二郎に持ちかけ、大久保は愛人お勇に西陣から帯地を取り寄せ、その生地を品川は長州の諸隊会議所の有職家の岡吉春が製作した。

王政復古の大号令の12月9日、岩倉は朝廷へ密かに錦の御旗を納めていた。唐門陣列し征夷大將軍御出陣した。

○ 長州の大調練

天保14年(1843)萩・芳賀台で1万4000人の士卒を動員。藩主毛利敬親の出で立ち「赤胴にて御紋打たる梨子地の御陣笠に、大袖付たる大和錦の御陣羽織を召し熊の皮の御行膝に、御小袴の裾(すそ)たをやかに装ほひ」(芳賀台御狩の記)

大調練の銃は古式銃の火縄銃で、飛び道具は足軽、下士の兵器。軍装も下士は筒袖羽織に股引き(ももひき)、藩士には大小の刀を許した。だんぶくろ・レキション羽織を嫌がった。軍装ファッションはファシズムにつながり、調練が繰り返された。実射訓練が少ない。オランダ歩兵のゲベール銃、フランスのミニエー銃の先込め銃が主力であった。

日本の藩士は刀槍や古式銃の稽古をしたが、調練(レキション)では練習(lesson)としてレキション羽織、袴(military pant)を着用した。銃器不足から大村益次郎らの調練実施も結果が出せなかった。幕府が洋装を禁止したため、日本の和装からレキション羽織に仕立てた。レキション軍装は、軽装で機能性を重視した。

和式の軍装は身分が認識できる着装で、薩摩に比べ長州は最後まで身分にこだわった。薩摩の兵士は侍で組織し、長州は諸隊で編成の身分がまちまちであった。

○ 総論

鳥羽伏見の戦いは、新政府軍5000人が旧幕府軍15000人に勝利したのは、新政府軍の薩摩、長州の新式銃器に加え、一方、旧幕府軍は陣羽織、袴の古武士姿で古い火縄銃の装備で、それに加え新政府軍の錦の御旗の奇策で反乱軍扱いされ、精神的に敗戦に追い込まれたと論じられてきたのは疑問。デジタル化で分析再調査するとそうではないことが判明。幕府の文久、慶応の軍制改革の調練で軍装にいち早く取り組んだ薩摩藩がこの戦いの主導部隊を編成、長州藩は新式西洋銃を使いこなせないまま、また調練を試みるも浸透せず、諸隊編成で援護部隊となってしまう。土佐藩は藩論統一できず物資運搬にとどまった。

旧幕府軍の主力部隊の会津藩、桑名藩、見廻組、新選組は軍装の不備、実弾射撃の練習不足からくる銃器の不徹底さ、さらに兵士の数に慢心して危機感が欠如した。

錦の御旗は同戦いの正当化するための大義名分で、新政府軍を天皇の軍隊に位置づけた。(薩摩の西郷隆盛は天皇を「玉」(玉座)と表現、天皇を味方にすることで、戦いを有利に勝利に導くことを、公家の岩倉具視が画策した。錦の御旗をひそかに制作し、大久保利通の愛人お勇に西陣で帯地を購入させ、長州の奇兵隊本部有職家に製作させた)

敗因は寝返った、淀、彦根、藤堂らのため総崩れしたことによる。さらに、指揮をとる徳川慶喜は、天皇家血筋にもかかわらず汚名をきせられ、失意し江戸へもどった。

一方薩摩の調練は鈴木武五郎がつとめ、鳥羽伏見の戦いでも第一小隊長として参戦した。薩摩は藩主島津斉彬が西洋かぶれの蘭癖大名とよばれるほどで、お雇い外国人を入れて、藩の近代化に着手した。

イギリスの元込めスナイドル銃の採用や大砲の開発、軍艦の造船などで先端をいった。長州藩は英国へ留学生をおくり、長州ファイブにより実用化に成功した。薩摩藩は戦記にもみられるように軍装の統一、最新式銃器で装備、とくに大砲の使用で勝利した。

※ 鳥羽伏見の戦い絵巻の時代背景： 開国を余儀なくされ、幕府諸藩が軍備の近代化、洋式化を急いでいた時期である。欧米の最新銃器を導入すると鎧武者の古式では戦力にならず、洋装に洋式銃といった歩兵部隊を編成しなければならなかった。当初蘭学者の高島秋帆が創始した砲術を中心とするオランダ式の兵学が導入され、軍装の洋式化がはかられた。高島流のほかに諸藩に、イギリス軍様式やフランス軍様式が取り入れられ、部分的に和装具をアレンジした軍装が導入されていく。調練とは近代軍隊の基本教練（礼式動作と集団行動）。

維新後の新政府の官僚役割からみても、薩摩、長州主導した公家の岩倉、三条らで組織、戊辰戦から箱館戦争で戦死者の多い藩から大臣クラスが抜擢された。薩摩の軍事面を川路は警察組織、とくに西郷は警視庁、大久保は県警を組織化した。堺の鉄砲鍛冶のほとんどが自転車製造に転職した。宮田はネジ（いまはゆるまないネジ）、フレーム加工、発射力から警視庁に警察官用自転車、消火器を納品、シマノは競技用自転車、釣り具リール開発し世界トップ企業。いまや電動自転車の時代も古式銃の工業技術は健在。葦山の反射炉は世界遺産で江川太郎左衛門が日本で初の堅パン焼き（pan 投げ）。炉に張り付け堅パン製造は、長岡戦争で河井継之助が兵士用携帯用堅パンの配給は有名なはなしである。

鳥羽伏見の戦い以降の軍制、軍装、銃器、食糧の変遷はめまぐるしい。